

長寿医療研究開発費 2022年度 総括研究報告

医療介護の連携や多職種協働を見据えた効果的な研修実施及び わが国の効率的な対外的窓口のあり方に関する調査研究 (22-22)

主任研究者 前島 伸一郎 国立長寿医療研究センター

長寿医療研修センター (センター長)

研究要旨

長寿医療研修センター (以下、「研修センター」) の本務である研修について登録システム構築及び課題の抽出と改善等を進め足下を盤石にする「医療介護の連携や多職種協働を見据えた効果的な研修実施に関する調査研究 (以下、「研修の効率化と充実に関する調査研究」)」と、国立長寿医療研究センターにおいて対外的対応の多くを担う研修センターとしての「わが国の効率的な対外的窓口のあり方に関する調査研究 (以下、「対外的窓口研究」)」を内外二本の柱として推進する。

<研修の効率化と充実に関する調査研究>

新型コロナウイルス感染症の影響により、研修センターにおいてもオンライン形式が導入されるようになった。しかし、受講者アンケートでは、移動時間削減等の利点を評価する声がある一方で、「横のつながりができる」や「集中して講義を聴くことができる」といった集合研修の利点を挙げる声もあった。

オンライン研修がこの2年の間に広範囲に浸透する中、より効果的な研修のあり方につき改めて検討する時期に来ていると思われる。特に一人の受講生が複数の研修をウェブにて受講する場合、重複を避ける工夫や過去に受講した研修を踏まえた「スキルアップ」としての研修の提案をしていくことも必要であろう。また、研修センターで実施している研修に参加している多職種の受講生の意見等を集計・分析することで、今後の研修計画に役立てると共に、国や県からの委託だけでなく、独自のフォローアップ研修の実施に向けた検討が可能となると考えられる。

これにより、研修のさらなる充実を図ると共に、国が推進している「医療と介護の連携」や「多職種協働」のさらなる推進に寄与できると考える。

<対外的窓口研究>

対外的窓口の不在に関しては、前身研究において各国の認知症関連組織における対外的窓口の人員及び財務体制の調査とともに、窓口が存在しないことで生じた実際のケース等についても調査を行ったが、新型コロナウイルス感染の世界的な広がりとそのための各国における移動制限をうけ、公開データあるいはメール等による間接的な情報収

集に終始せざるを得なかった。

しかし、関係機関が発信する情報のみでは当事者バイアスが排除しきれないため、本研究では現地に赴いての関係者調査、視察等を通じた客観的情報収集と分析も進め、有識者及び関係機関代表を集めての検討や協力体制の構築を通じ、将来的な対外的窓口の構築に資する。

加えて、長寿医療研修センターが当施設を実習病院として受託している大学・専門学校との密接な連携が構築できているかどうかを検証するために、当該機関への情報収集と分析を実施し、次世代の医療・福祉を担う人材育成に必要な体制の構築を目指す。

主任研究者

前島 伸一郎 国立長寿医療研究センター 長寿医療研修センター（センター長）

分担研究者

堀部 賢太郎 国立長寿医療研究センター 長寿医療研修センター（ユニット長）

進藤 由美 国立長寿医療研究センター 長寿医療研究センター

（在宅医療研修ユニット長）

A. 研究目的

新型コロナウイルス感染症の影響により、研修の形態は今後さらに多様化すると考えられ、より効果的に研修を実施するための方策について改めて検討する時期に来ていると思われる。特に一人の受講生が複数の研修を受講する場合、重複を避ける工夫や過去に受講した研修を踏まえた「スキルアップ」としての研修の提案をしていくことも必要であろう。また、研修センターで実施あるいは受託している研修に参加している多職種の受講生の意見等を集計・分析することで、今後の研修計画に役立てると共に、国や県からの委託だけでなく、国立長寿医療研究センター独自のフォローアップ研修の実施に向けた検討が可能となると考えられる。

また、わが国の認知症施策は海外からも高い注目を浴びているが、対外的窓口が不在であることにより、一部に負担が集中したり、偏った情報が海外に伝わる等の不具合が生じている、そこで、前身研究において令和2年から3年にかけて、各国の認知症関連組織における対外的窓口の人員及び財務体制の調査を行うとともに、不十分な対外的対応の結果として実際にわが国にとって不本意な報告書が出たケースに関しても原因と背景の究明を行った。また、認知症の人と家族の会が受託した老人保健健康増進等事業「認知症に関する国際交流プラットフォーム構築のあり方に関する調査研究事業」に参加・協働し、ウェブサイトの公開まで辿り着いている。

しかし、新型コロナウイルス感染の影響で海外での現地調査や国内でも直接的に対人接触を要するものは困難となり、窓口研究に関してはあくまで公表データあるいはメー

ル等による間接的な情報収集に終始している。当初予定していた現地調査は叶わず、令和2年度中の実施は現実的ではない。また、国内移動の制限もあり、予定していた検討委員会の開催も遅れている。

関係機関が主体的に開示する情報はどうしても当事者バイアスがかかったものとなり、現地に赴いての関係者調査、視察等、血の通った情報の収集は欠かすことができないため、本研究においてはその実施等により十分な情報収集と分析を進め、有識者及び関係機関代表を集めての検討や協力体制の構築を通じ、将来的な対外的窓口の構築を目指す。

B. 研究方法

<研修の効率化と充実に関する調査研究>

研修の「受講者登録システム」を構築し、当センターで実施している様々な研修の受講生の情報を一括して管理することにより、多職種の情報を一元的に管理し、将来の研修プログラムの開発等に役立て、全国の医療介護福祉の専門職や自治体職員のスキルアップに貢献することを目指す。また、学生実習に関しては別途に情報を管理し、養成校との情報交換に活用すると共に将来進むべき方向づけに役立てる。

そのためにも「受講者登録システム」の構築に向け、当センターで実施している全研修の受講者情報を整理し、システムに入力する情報を検討する。専門業者に委託をし、システムを構築、初年度は愛知県研修の受講者情報を入力、整理・分析を行う。

<対外的窓口研究>

認知症施策及びケアに関する対外的窓口に関する国内外の事例の実態調査を研究協力者の協力のもとで行い、わが国と海外の対外的窓口の比較を行うと共に、わが国の課題を明らかにし、効率的な国際連携に資するための対外的窓口のあり方につき、必要に応じて有識者等の協力も得て以下のような点からの検討を行い、まとめる。

1. 各国における対外的窓口組織の現状
2. わが国のあるべき対外的窓口に求められる機能
3. その運用に必要な最低限度のスペック（人的・資金的資源）
4. 効率的且つ持続性の高い運営のために求められる体制
5. 想定される促進要因・阻害要因
6. 既存組織の成功、失敗から学び、短期間に実現する工夫

また、積極的に国際連携を進めている国々における現地調査や、国際アルツハイマー病協会国際会議及びWDC総会等の場を通じ、対外的窓口の体制と資金調達について情報収集を行う。「日本認知症国際交流プラットフォーム」の改善と運営を通じ、海外関連機関との複合的な協力・交流のあり方を探る。

(倫理面への配慮)

研究実施に先立ち、当センター倫理・利益相反委員会の承認を得て実施する。対象者の研究参加・中止の自由を保障するとともに、個人情報の管理を厳重に行う。なお、個人情報を含まない集計された既存統計データや資料を用いる場合には、倫理審査の必要がなく、その資料を用いて解析を行う。

C. 研究結果

研修の効率化と充実に関する調査研究としては、分担研究者の堀部が ASEAN 関連組織の ACAI より招聘を受け、“International Conference on Geriatric Medicine and Gerontology 2022 under the ASEAN Centre for Active Ageing and Innovation”に参加し、パンデミックとその後に向けたわが国の状況について発表を行った。

今後の広範な関連機関への調査に向けて、アジアを中心として幾つかのアルツハイマー病協会に予備的調査を行うとともに、翌 2023 年 3 月には、WDC 総会にも招聘され各国アルツハイマー病協会及び研究者等の関連関係者との情報共有を行い、英国アルツハイマー病協会における、国際部門の現状とパンデミックの影響に関する調査を行った。

対外的窓口研究として、各研修の受講者情報を整理し、入力項目を整理するとともに、受講者登録システムの入力画面の必須項目に色を付けるなどの工夫をするるとともに、画面の左側に共通項目、右側に個別項目を入力するなど、わかりやすい画面とした。

D. 考察と結論

パンデミック以前の英国アルツハイマー病協会は充実した国際部門を有しており、その予算は潤沢であった。これにはわが国の認知症サポーターを手本とした **Dementia Friends Programme** 事業を政府がバックアップしており、国際部門にはその国際展開活動も求められていたという事情があろう。その背景として、政府としては同事業が国際的プレゼンスの向上手段として費用対効果が高いと判断し、協会としても政府との繋がりには様々なメリットがあると判断し協働していたとされる。今回の取材に際しては、担当官から国際担当窓口のあり方について数多くの有用な解説と助言・提案をうけ、これらは今後の研究推進における分析や検討に際し重要な示唆に富むものであった。

受講者登録システム構築においては最も基礎的な情報のみを共通項目とし、研修ごとに確認すべき項目は個別項目として別に入力画面を設けたため、わかりやすい画面となった。今後認知症サポート医研修や認知症初期集中支援チーム員研修等、研修費を徴収している場合はその情報の入力も必要になってくることに加え、大学からの実習生の情報を入力する際には実習日数や実習先の入力も必要になるとと思われる。そのため、現時点では確認で

きていないシステムエラーや入力画面の見え方や項目の順番等、細かな点での調整が必要になると考えられる。

E. 健康危険情報

なし

F. 研究発表

1. 論文発表

1. Yoshitake M, Maeshima E, Maeshima S, Osawa A, Ito N, Ueda I, Kamiya M. Olfactory identification ability in patients with mild cognitive impairment and Alzheimer's disease. *J Phys Ther Sci* 2022;34:710-714.
2. Yoshitake M, Maeshima E, Maeshima S, Sasaki K, Osawa A. Association between cognitive function and olfactory identification ability in community-dwelling older individuals. *J Phys Ther Sci* 2022;34:459-462.
3. 山路千明, 前島伸一郎, 永井 将太, 渡邊 誠, 稲本 陽子, 園田 茂. 回復期リハビリテーション病棟における左被殻出血の血腫型による失語症重症度の特徴. *脳卒中* 2022;44(1):6-11.
4. 神谷正樹, 大沢愛子, 村田璃聖, 植田郁恵, 前島伸一郎, 櫻井孝, 近藤和泉. 軽度認知障害と認知症の介護負担感の1年の経過と変化の要因に関する探索的検討. *Dementia Japan* 2022;36:142-151.
5. 前島伸一郎, 大沢愛子. 臨床神経心理士：学会認定資格取得のお勧めーリハビリテーション科医の立場から. *高次脳機能研究* 2022;42:35-39.
6. 太田久晶, 前島伸一郎. さまざまな注意のかたち. *神経心理学* 2022;38:172-174.
7. 山路千明, 前島伸一郎, 永井 将太, 渡邊 誠, 稲本 陽子, 園田 茂. 回復期における左被殻出血患者の失語症の改善に与える要因. *脳卒中* 2022;44(6):607-614.
8. 前島伸一郎, 神里千瑛, 大沢愛子. 高齢者の認知機能障害に対するリハビリテーション. *Geriatric Med (老年医学)* 2022;60:991-996.
9. 大沢愛子, 前島伸一郎, 荒井秀典. CGA以外のADL評価法とその問題. *Geriatric Med (老年医学)* 2022;60:419-23.
10. Kawamura K, Maeshima S, Osawa A, Arai H. Overarching goal and intervention for healthy aging in older people during and after the COVID-19 pandemic: Impact of rehabilitation. *Palermo S, Olivier B, eds., In: COVID-19 pandemic, mental health and neuroscience- New scenarios for understanding and treatment. IntechOpen, UK, <https://www.intechopen.com/online-first/83337>*

11. Osawa A, Maeshima S, Arai H. Applying Information and Communication Technology to Promote Healthy Aging in Older People: Japan's Challenges and Perspective. Digital Health; ISBN: 978-0-6453320-1-8. Exon Publications, Brisbane, Australia. 2022
12. 前島伸一郎, 大沢愛子. 高次脳機能障害への対応. 日本臨床 (増刊号) 最新臨床脳卒中学 (第2版), 2022, pp632-636

2. 学会発表

1. 前島伸一郎, 大沢愛子, 川村皓生, 吉村貴子, 大高恵莉, 佐藤弥生, 植田郁恵, 伊藤直樹, 近藤和泉, 荒井秀典: 本邦における認知症診療における神経心理学的評価の実態. 第41回日本認知症学会学術集会 (シンポジウム). 東京, 2022
2. 大沢愛子, 前島伸一郎, 植田郁恵, 神谷正樹, 伊藤直樹, 神里千瑛, 近藤和泉: 認知症診療における専門性〜リハビリテーション専門医の立場から. 第41回日本認知症学会学術集会 (シンポジウム). 東京, 2022
3. 大沢愛子, 前島伸一郎, 植田郁恵, 神谷正樹, 伊藤直樹, 神里千瑛, 近藤和泉: 私の推奨する認知症リハビリテーション. 第41回日本認知症学会学術集会 (シンポジウム). 東京, 2022
4. 前島伸一郎. 言語回復のメカニズム. 第46回日本高次脳機能障害学会学術総会サテライトセミナー. 山形, 2022

G. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録
なし
3. その他
なし